

女性を表す語句と表現：30年の歳月がもたらした変化

Words and Expressions that Describe Women: Changes Brought About in These 30 Years

柳 谷 啓 子*

Keiko Yanagiya

Abstract

This study aims to determine the present status of words and expressions describing women in Japanese society. By analyzing 286 personality profile columns “HITO” from *The Asahi Shimbun* in the early 2020s and comparing the results with the findings of Endo’s (1997) analysis of the situation 30 years ago, we obtained the following results: 1) the male / female ratio of those featured improved from over 80% male to almost 50 / 50 male / female, 2) many words with “feminine articles” still existed, thereby “marking” women as exceptional and marginal, 3) words that are supposedly gender-neutral continued to refer exclusively to men, making men the norm, 4) many words describing occupation with feminine articles co-occurred with “the first” and “the only” as modifiers, depicting women in the position as rare and minor, and 5) stereotypical and subjective descriptions that trivialize women were not found, but family information depicting a woman as an appendage of her husband still prevailed.

Key Words: expressions, women, newspaper, profile columns, feminine articles, gender equality

1. 1990 年台初頭の「女性を表す語句と表現」

本研究は、SDGs（持続可能な開発目標）⁽¹⁾達成の機運がようやく高まり始めた現在の日本社会において、ジェンダー平等実現に大きく関わる「女性を表す語句と表現」がどのような状況にあるのかを、1990 年台初頭の状況との比較を通して明らかにすることで、日本社会の女性を巡る今日の状況を把握することを目的とする。

遠藤（1997）は、1990 年台初頭の新聞や新聞に掲載される雑誌広告の分析を行い、現代日本語の女性を現す語彙・表現にどのようなものがあるかを調査した。具体的には、1990 年 7 月から 1991 年 6 月の『朝日新聞』『ひと』欄、『毎日新聞』『ひと』欄、『読売新聞』『顔』

*人文学部教授—社会言語学・談話分析

欄など、新聞の人物紹介欄を対象として、偉業を成し遂げた人物の取り上げ方、語句や言い回しを分析して、当時、女性がかどのように表現されていたかを調査した。加えて、遠藤（1997）では、1991年6月から1992年5月までの『朝日新聞』の広告欄に掲載された雑誌広告を対象とし、特別な偉業のない一般人の表現のされかたも分析している。

分析の結果、まず、「女性を表す語」に関しては、新聞の人物紹介欄の特徴として、以下を見出した：1) 人物の性情・行動を特徴づける名づけは男性を表すもののほうが多い、2) 女性を表すものは「意地っ張り」、「肝っ玉母さん」など、行動力・包容力に焦点を当てたものが多い一方、男性を表すものは「第一人者」、「アイデアマン」など、知的能力に焦点を当てたものが多い、3) 「女性副知事」、「ママさんバレー選手」など、指示対象が「女性であること」を明記する例は多いが、「パパさん選手」など、男性であることを明記する例は存在しない。

また、雑誌広告の表現する女性の特徴としては、以下を挙げている：1) 女性を表す語のほうが圧倒的に多い、2) 男性に関しては外来語が多く、「エリート〜」、「トップ〜」など、地位や能力が上であることを示すものが多く、女性に関するものは混成語が多く、「グラマー〜」、「美人〜」など容姿に関するものや、「〜ギャル」、「ミス〜」など未婚であることを示すものが多い。

総じて言えば、新聞の人物紹介欄では、男性を描写する語句のほうが多く、しかも能力の高さなどを表すものが多く、雑誌広告欄では、女性を指す語のほうが圧倒的に多く、若さ、容姿、男性へのサービスを中心とする職業名などが多いという結果となったことが報告されている。このことから、遠藤は、こうしたマスメディアにおける女性描写は、女性は若さ・容姿・男性への献身においてのみ話題の対象となるという男性中心社会の固定観念を助長するものであると考察している。

「女性を表す表現」に関して遠藤（1997）は、1) 女性であることとその業績を結びつけたもの、2) 家族に関する情報、3) (記者から見た) 性格、行動に関する表現、4) 女性を低く見た表現の4つの観点から分析しており、以下のような特徴を挙げている：1) 「女性ならではの……」など、女性の見方に関するものや、「主婦感覚に期待」など、女性の感じ方に関するものが多い、2) 家族関係への言及の割合は、男性で30.2%であるのに対し、女性では56.2%であった。また、その言及内容に関しては、男性は妻の名前や子どもの人数などが一般的であるのに対し、女性の場合は、「夫の助力」、「家族の応援」、「妻、母、〜の三役を見事にこなして……」など、女性はあくまでも家族を守り、家庭を大切にするものだという前提上の記述が多い、3) 男性に関しては、「バランスのとれた視点」、「しんの強さ」など、才能・能力を表すものや性格を表すものが多く、女性では、「肩ひじはらず」、「負けん気の強い」など、自然体で臨む様子や、意志・精神力の強さを表すものが多く、記者の先入観（女性でこの役職に就くにはさぞかし気負っていることだろう）が反映された記述が多い、4) 「〜に続き2人目。女性ではもちろん初めて」、「このほど霞が関に初の女性編集者が誕生。しかも

専門職の濃い経済誌」など、無意識のうちに女性を一段低く見るような表現が存在する。

こうした分析結果を踏まえ、遠藤（1997）は、マスコミが描く人物紹介は、「従来の固定化された女性的、男性的という枠組みをそのまま受け継いで女性も男性も縛り付け、自由な発想を妨げることになってしまっている」という。また、記者らの表現は、「めざましい働きをして立派だと賞賛する反面、女性が社会的に認められる活躍をするには、家庭のことも十分にこなすことを無言のうちに強要している」、「男女を問わず、結婚して家庭を持つ生き方が絶対的なものではないにもかかわらず、それ以外の形態を選ぶ人への無言の圧力となってしまう」、「肩ひじもはらず、あからさまに決意をむき出しにしてもならず、しかも、その強い意志がなければ目標に達することもできない」（遠藤 1997：110）女性というものを印象づけてしまい、職業における「無意識の差別意識」（遠藤 1997：112）が出てしまっていると批判している。遠藤（1997）は、結論として、マスコミは現実を基に表現を生み出すが、その表現が現実にはね返って受け手の現実を規定し、それを補強して再生産していく過程を如実に表すことができたと結んでいる。

2. 男女格差指数（Gender Gap Index）の現状

遠藤（1997）の研究のデータが採取された時期から約 30 年が経過した。近年、SDGs の普及とともに、日本においてもようやく「ジェンダー平等」の概念が広まりつつある。とは言え、相変わらず世界男女格差指数（Global Gender Gap Index = GGGI）⁽²⁾は先進国の中では低迷し続けており、1.0 に近いほど男女格差が少なく平等であることを表すスコアは、2021 年（調査対象年は 2020 年）には 0.656 で、総合順位は 156 カ国中 120 位だった（World Economic Forum 2021）。つまり、日本社会においては、女性が得るのは男性が得るものの 65.6% のみということになる。とりわけスコアが低いのは、国会議員の女性割合（0.110）、閣僚の女性割合（0.111）、管理職における男女平等（0.173）、所得の男女平等（0.563）、同種業務の給与における男女平等（0.651）、専門職・技術職における男女平等（0.699）であり、いずれも 1 からは程遠い。特に「経済的参加と機会」と「政治的エンパワーメント」の分野に問題があり、ともに前年に比べてスコア自体は微増している（「経済」では 0.598 から 0.604 へ、「政治」では 0.049 から 0.061 へ）ものの、順位は落としている（「経済」では 115 位から 117 位へ、「政治」では 144 位から 147 位へ）。この現状は、たとえば、G7 各国がジェンダー平等の実現に向けて意識的な努力を加速させ、概ね目に見えて改善されつつあるのに対し、日本社会がジェンダー平等実現に関して停滞していることの表れであると考えられる。G7 における男女格差指数の 2006 年（数値公表が開始された年）から 2021 年までの変遷を図 1 に示す。

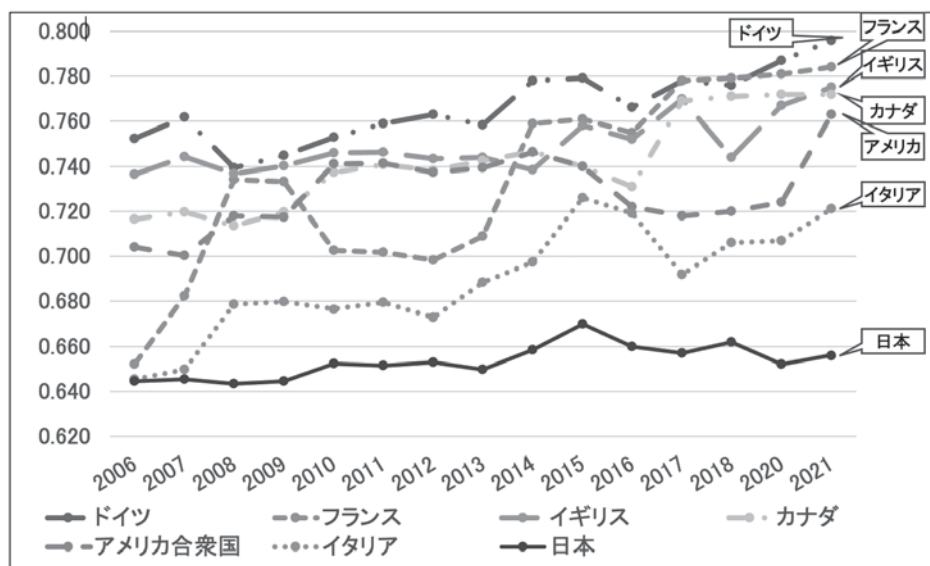


図 1. G7 における GGGI の 2006 年から 2021 年までの変遷

出典：World Economic Forum. *Global Gender Gap Report 2006-2021* を基に筆者が加工・作成

3. 女性を表す語句：1990 年代初頭と 2020 年代初頭の比較

3.1 分析対象期間の『朝日新聞』「ひと」欄

こうした実社会の現実を突きつけられるにつけ、日本社会のジェンダー平等に関する認識がなかなか変わらない原因を遠藤（1997）が指摘するようなマスメディアの影響に求める検討の必要性を感じる。30 年経った現在もまだ、「マスコミは現実を基に表現を生み出すが、その表現が現実にはね返って受け手の現実を規定し、それを補強して再生産」され続けているのだろうか。

そのことを明らかにする一助として、本研究では、2020 年 7 月から 2021 年 6 月までの『朝日新聞』「ひと」欄の人物紹介に絞って分析し、新聞における「女性を表す語句と表現」が変化してきたのか否かを調査する。もちろん、今日では新聞を購読している家庭はめっきり減り、若者に至ってはほとんど新聞を読まないが、それでも新聞社のオンライン版の記事は SNS のリツイートやまとめサイトを通じて社会全体に対して一定の影響を与えていると感じられる。

遠藤（1997）では、『朝日新聞』の他、『毎日新聞』と『読売新聞』も合わせた数値が示されているため、2020 年 7 月 1 日から 2021 年 6 月 30 日までの『朝日新聞』「ひと」欄（発行社が東京のものに限定）に加えて、改めて 1990 年 7 月 1 日から 1991 年 6 月 30 日の同欄を収集し、それぞれが女性・男性を紹介している記事の件数を集計したところ、表 1 のような結果となった。

こうして数値を比較してみると、GGGI の順位の低迷とは裏腹に、この 30 年で取り上げ

表 1. 各分析対象期間の『朝日新聞』「ひと」欄の内訳

	1990 年 7 月 1 日～1991 年 6 月 30 日		2020 年 7 月 1 日～2021 年 6 月 30 日	
男性紹介記事	223	85.2%	161	56.3%
女性紹介記事	39	14.8%	125	43.7%
合計	263 ⁽³⁾	100.0%	286	100.0%

られる男女の偏りにかなりの改善が見られる。かつて 85% 以上と、断然男性紹介記事が多かった人物紹介欄が、今日では、男女ほぼ同等に取り上げられるようになっていることがわかる。新聞が実社会の鏡であるとすれば、これは一見、男性優位社会からジェンダー平等社会が実現しつつあるとも受け取れる。この件については、7.2 で検討する。

3.2 女性を表す語

3.2.1 女性冠詞

女性を表す語についても遠藤（1997）では 3 紙まとめた数値といくつかの例を挙げる形で扱っているため、2020 年代の人物紹介欄 286 件に加えて 1990 年代の 263 件についても、田中（1984）が女性冠詞と呼ぶ「女性～」、「女子～」、「女～」などを伴う語を抽出した。使用されていた女性冠詞を伴う女性を表す語の一覧を表 2 に示す。なお、男性については、2020 年代に「女性隊員」に対比させる意味で「男性隊員」が用いられている 1 件を除いて、このような表現は両期間とも該当するものがなかった。

表 2. 各分析対象期間の『朝日新聞』「ひと」欄で使用されている女性冠詞を伴う女性を表す語

1990 年 7 月 1 日～1991 年 6 月 30 日	2020 年 7 月 1 日～2021 年 6 月 30 日
女医さん (3) ⁽⁴⁾ 、熱血女子、女子生徒 (3)、女性委員長、女教師、女優 (2)、女子大生、女性作家、帰国子女、女性航海士、女性解説委員、女性助役、女性プロドライバー、女性副知事、女性管理職、女性市長、女性科学者、女性局長、女性キャリア (19 例)	女性社長、女性トップ、女性議長、女子高校生 (2)、女性 GM、女子中学生、女優、女性編集長、女性アスリート (2)、女子選手 (2)、女性コーチ、女性研究者、女性投資家、女性常勤理事、女性トレーナー、女性土木技術者、海女、女性科学者、女性スタッフ、女子職員、女性議員、女性地方議員、ママ友 (23 例)

田中（1984）は、女性冠詞について以下のように定義している：

女性を“男性＝人間”から区別するための徴づけとしての“女○○”、“女子○○”、“女性○○”、“女流○○”といった語法を、かりに「女性冠詞」と呼んでおこう。

（田中 1984, 195：9-10）

田中（1984）の言う「^{しるし}徴づけ」は、プラーグ学派の音韻論に由来する言語学の用語である「無標 (unmarked)」、「有標 (marked)」を踏まえたものと思われる。二項対立する言語項目（群）において、一般的／典型的であるほうを無標、より出現頻度が低く、特別視されるほうを有標と呼ぶ。^{しるし}徴があるかないかで普通か例外かが明示されるという意味で、有徴・無徴と訳す場合もある。つまり、30年を経た現在でも、様々な職種・役職・身分（研究者、技術者、科学者、議員、社長、議長、編集長など）において、依然として男性がデフォルトであり、女性はその立場にあることは例外的で珍しいというレッテルが貼られた描かれ方をされていることになる。

田中（1984）は、女性であることを冠した上記のような表現の中には、本来的には両性それぞれに対称的な表現を持つものもあるが、男性の場合の表現にその対応物がない言葉も数多いことを指摘している。この視点から1990年代と2020年代の女性冠詞つきの表現を見てみると、1990年代の中で対応する男性版が存在しないものには、「女医さん」、「女子大生」、「帰国子女」がある。「男医さん」、「男子大生」（「男子大学生」はある）、「帰国子男」（「子」が「息子」を表すため同義語反復になる）は存在しない。「海女」は、一般的には「保母」や「看護婦」と同様に、いわゆる「ジェンダーを含み込んだ職業語」（田中2011：78）であるが、本来は「海人」というジェンダー・ニュートラルな語が存在し、男性の海人を「海士」、女性の海人を「海女」と記す用法が存在する。しかし、近年では女性がこの職に就くことが多いため、もっぱら「海女」という表記が流通することになったものと思われる。

3.2.2 男性の無標性

2020年代の中ではこの種の表現はないことから、女性差別表現の使用状況は改善されたと言えなくはない。しかし、対応する男性版が存在しないわけではないものの、無標の形態がもっぱら男性を指す語を考えれば、必ずしもそうとは言えない。たとえば、Segrave et al. (2009) がスポーツにおけるジェンダーの有標化 (gender marking) について指摘しているように、女子競技では通常「女子サッカー」のように女性が競技者であることを有標化して示すが、単に「サッカー」と言えば、一般的には男性競技者によるそれを示す (Segrave et al. 2016：32)。つまり、形式としては「男子サッカー」という表現は可能であり、競技者の性別を区別する必要がある場合には用いられるが、通常の場合、敢えて「男子」はつけない。サッカーにおいては男性がデフォルトなのである。

今回の調査で言えば、1990年代のリストにも2020年代のリストにも登場する「女優」という語がこれに当たる。対応する「男優」という語が存在し、アカデミー賞で男女別に授賞する際などには用いられるが、通常「俳優」と言えば、もっぱら男性を指す。Wikipediaなどでも、男性の俳優の紹介では「俳優」、女性の俳優では「女優」という語を用いて紹介している。

2020年代のリストに登場する「ママ友」に関しては、対を成す「パパ友」という表現も

最近年では使われるようになってきてはいるが、まだ Wikipedia に立項されるほどには市民権を得ていない。「ママ友」という表現は、乳幼児の母親同士が保育園や公園などで友だち関係になった者を指し、育児は母親の役割であるとの旧来の性役割分担が下敷きになっている表現であることは明らかである。「イクメン」（積極的に育児に関与する男性）の普及とともに、「パパ友」も普及し始めてはいるが、まだ日は浅く、「ママ友マウンティング」、「ママ友ピラミッド」、「ママ友ランチ」、「ママ友お茶会」、「ママ友カースト」などに匹敵する複合表現はまだ見られない。

なお、上述の「帰国子女」という表現については、恐らくたまたま 2020 年代には対象となるような人物が紹介されなかったものと思われる。「帰国子女」という表現は現在でも広く使われており、現に筆者の勤務校においても「海外帰国子女」などを対象とする特別選抜入試を実施している。この表現が女性差別に当たるか否かで、インターネット上ではしばしば炎上案件が持ち上がっている。「子」は「息子」を表し、「女」は「娘」を表すが、この場合、現代日本語における「子」に女子は含まれないことになり、たとえば、1946 年創刊の『日本教育新聞』は差別用語であるとして、2001 年には以後、「児童・生徒」に改めることを決めている（『『子女』の表現改めます』『日本教育新聞』2001 年 3 月 23 日）。また、文部科学省でも、主に「帰国児童・生徒」という表現を使用している（たとえば「帰国児童生徒の動向」『文部科学省』2009 年以前）。

しかし、インターネット上では、「子」＝「息子」、「女」＝「娘」であり、両性を含めた表現なのだから差別用語には当たらないとの言説や、「男」が用いられていないことからむしろ男性差別だとする意見（「帰国子女についての質問です」『YAHOO! JAPAN 知恵袋』2010 年 3 月 5 日）、日本国憲法の第 26 条第 2 項に「すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ」とあることを根拠に、憲法が認める PC (politically correct) 語⁽⁵⁾であるとの主張も見受けられる。さらに、古くから「王子・王女」などのように「子」＝「息子」として用いてきた由緒ある表現なのだから改める必要はなく、それを修正せよというのは「言葉狩り」であるとの議論もある（「ノート『帰国子女』」『Wikipedia』最終更新日 2019 年 2 月 17 日）。

こうして見ると、人物紹介欄に取り上げられる人物の性別こそ男女同等に近づいてきたものの、相変わらず無意識のうちに（無自覚な）女性差別表現は使い続けられている状況であることがわかる。

4. 女性を表す表現

4.1 女性を表す語と修飾語の共起関係

女性冠詞が女性を有標化して、様々な職種・役職・身分において、依然として男性がデフォルト（無標）であり、女性とその立場にあることは例外的で珍しいとして描く際に用いられることについては既に述べた。実際、「女性」という語と「初の」、「初めての」や「唯一の」などの修飾語の共起頻度は高い。1990年代の人物紹介欄263件の中での「女性」の出現は59件で、そのうち「初の」などとの共起は11件（18.6%）あった。2020年代の人物紹介欄286件中では、「女性」は69件出現し、そのうち18件（26.1%）が「初の」などの修飾語と共起している。「男性」については、1990年代で6件、2020年代で20件出現したが、いずれの場合も「初の」などの修飾語と共起した例はなかった。また、係り受け解析⁽⁶⁾では、2020年代では「唯一」-「女性」が共起件数8位、「初」-「女性」が9位と上位に来ていることが目をひく。表3に各年代における「女性」と「初の」などの共起表現の一覧を示す。

2020年代のほう是件数が多いのは、恐らく女性を取り上げている記事件数が多いからだが、取り上げ方自体は30年を経て変化していないことがわかる。両期間ともに、一見、もっぱら男性が就く職業・職位に女性が就いたことを褒め称え、ニュースとするに足る快挙であると報じている。しかし、読者側としては「すごい女だ」として、特別に高い能力を持つ例

表3. 各分析対象期間の『朝日新聞』「ひと」欄で「女性」と「初の」などが共起する表現

1990年7月1日～1991年6月30日	2020年7月1日～2021年6月30日
初の日本医労連の女性委員長 日本初の外航客船の女性航海士 初の女性解説委員 ル・マン耐久レースに日本女性で初めて挑む 国内ただ1人の女性プロドライバー 全国初の女性副知事 全国で初めて誕生した女性副知事 全国初の女性市長 女性で初めてNHK番組制作局長 文部省初の女性局長 文部省に女性キャリア第1号として入省	Jリーグの56クラブで唯一の女性社長 全国中央組織で初の女性トップとなった元教師 初の女性議長 女性がトップに就くのも初めて 大リーグで女性初のゼネラルマネジャー 「オール読物」初の女性編集長 女性の進行役は初めて 女性として初めて編集長に就いた 女性の主幹は初めて WTO初の女性 7代目で初の女性 男子3部リーグで女性初の監督 Jリーグただ一人の女性常勤理事 プロ野球12球団唯一の女性トレーナー パナソニック唯一の女性スタッフ 職場で唯一の女性 日本人女性として初めて受賞したゴールドマン環境賞

外的な女性として受け止めるのが一般的であり、女性がその職業・職位に就くことが一般化したとは受け取らない。よほど意地を張って頑張ったのだろうか、家族の支えや犠牲があって実現したに違いないなどと受け取る人すらいるだろう。したがって、このような表現はなおさら女性を特殊化し、周辺に押しやる方向に働く可能性は否めない。

因みに、1990年代の係り受け解析では、「妻」-「暮らし」が件数として1位、「女性」-「地位」が9位、「女性」-「向上」が10位であった。これは、男性紹介記事が多いため、「妻と二人暮らし」などの家族情報が多いためと思われる。また、「女性」-「地位」や「女性」-「向上」は、当時、女性の社会進出が奨励される風潮の中で、積極的に「初の女性〇〇」を取り上げた結果であると思われる。

4.2 女性を描くために用いられる情報

遠藤（1997）が、「女性を表す表現」に関しては、1) 女性であることとその業績を結びつけたもの、2) 家族に関する情報、3)（記者から見た）性格、行動に関する表現、4) 女性を低く見た表現の4つの観点から分析していることは既に述べた。この面での2020年代の人物紹介欄はどのような状況にあるだろうか。

まず、女性であることとその業績を結びつけた描き方としては、2020年代の人物紹介では「女性視点の防災講座」1件のみだった。もっとも、1990年代のほうでも、『朝日新聞』の「ひと」欄に限って言えば、「女性の視点で環境の危機をえぐる」という表現1件しか見当たらない。恐らく記者（当時はもっぱら男性）としては、女性であることが偉業に結びつくという発想には至りにくく、したがって、そのような表現が稀なのだと考えられる。

家族に関する情報については、1990年代では以下のような例があった：「妻として母として」、「製鉄会社に勤める夫の励ましもあり」、「夫に買ってもらったワープロ」、「こどももいるし、仕事を減らさないと」、「地の顔と主婦の顔が見え隠れ」、「兵役中の長男、高校生の次女の母でもある」、「当初は反対していた夫の喜一さんが、『がんばれよ』とビールで乾杯してくれた」、「『家事は手抜き』と割り切って」などである。つまり、女性の役割は第一に家を守ることであり、妻として母として立派に家を守った上で、夫など家族に支えられながら偉業を達成する、という構図の取り上げ方が主流だった。

『朝日新聞』「ひと」欄では、その後、1992年9月20日から個人のプライバシーに関する記述を減らす方針をとったという（遠藤1997：113）。しかし、2020年代に入ってから、1990年代ほどではないまでも、やはり同様の傾向は見られた：「夫のイタリア赴任を機に大学をやめた」、「今は夫の職場がある名古屋市に住み」、「夫の転勤で長崎へ」、「夫の中国赴任が決まり、キャリアアップを目指して転職した会社を退職」、「8歳の息子を育てながら完成させた」、「出張が多いが、家にいるときは娘2人に料理を作り、話を聴く」、「母親としての役割を大事にする」など。現在に至っても、女性はいくまでも夫に付随するものであり、家

事・育児をこなしてこそ、社会でのその活躍が誉められるものであるかのような書き方が、相変わらず見受けられるのである。

記者から見た被紹介者の女性の性格、行動に関する表現として、1990年代ではたとえば以下のようなものがあつた：「少女の明るさ」、「おっとりとした謙虚なところ」、「もの静かだが、シンの強さを感じさせる」、「負けず嫌いの意地っ張り」、「はきはきとした、自立心の強い女性だ」など。これらの表現は、記者による先入観のフィルターを通して見た対象女性の姿を評したものであり、きわめて主観的な寸評のようなものである。

これに対して、2020年代ではこの手の主観的表現は一切用いられておらず、女性の性格や心情などを表す手法としては、本人の言葉の引用や、客観的な行動そのものの記述が用いられている。たとえば、1990年代であれば「負けず嫌いの意地っ張り」と書いているであろうところを「何度も候補に挙がっては選ばれなかった。だが、くじけない」と表現したり、かつてならば「もの静かだが、シンの強さを感じさせる」と書いていたであろうところを「芯を通して生きる姿は主人公とも重なる。伸ばした背骨は、まっすぐだ」と書いたりしている。

女性を低く見た表現についても同様で、1990年代では、「日本女性で初めて、男の世界へ挑戦」、「男性職員の気構えは見習わなければ」などが見られたが、2020年代では1件も見当たらなかった。この点と上述の記者の主観の件については、何らかの記者用ガイドラインの影響を感じさせるが、共同通信社『記者ハンドブック：新聞用字用語集』にジェンダー表現の扱いが加わるのは、2022年刊行の第14版になってからである。また、朝日新聞出版『朝日新聞の用語の手引き』には、2019年刊行の改訂新版になってもジェンダー関連の記述は見当たらない。

5. 新聞におけるジェンダー平等実現のための動き

5.1 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会

前述のように、この30年間で、新聞の人物紹介欄は、男女の紹介件数の均等化やあからまざまな女性差別や女性蔑視の表現の減少など、一定の進歩が見られるわけだが、それは主にメディアにおけるジェンダー平等を実現しようという研究者らの社会への働きかけによるところが大きい。上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会は、早くも1996年には、「ジェンダー的公正報道の五原則」の提言を行っている。上野他（1996）『きつと変えられる性差別後：私たちのガイドライン』の冒頭で、上野らは以下のように述べている：

わたしたちは、英語の非差別ガイドラインの多く共通のジェンダー公正原則を研究し、日本での新聞報道の基準に応用し、以下の五原則として提案する。これは日本の新聞報

道に関して提案された最初の非性差別表現原則である。

(上野他 1996：8)

具体的な五原則は以下のとおりである。1. 性別情報不問 (ジェンダー・フリー)：「男性＝標準，女性＝例外・下位・特殊」という社会規範が浸透している現状では，必要がない限り性情報は含まない，2. ジェンダー的公正 (ジェンダー・フェア)：ジェンダーに関する情報が不可欠な場合には，表言方法，表記順，回数などにおいて公平・公正な取り扱いをする，3. (両性の) 対称な取り扱い (パラレル・トリートメント)：両性の職業名，肩書き，敬称などは取り扱い不均衡 (差別) にならないようにする，4. 包括的な表現 (インクルーシブネス)：特定のグループや性を排除する言語や形式ではなく，多様な集団を包括する言語や形式を使う，5. 脱・固定概念 (バイアス・フリー)：性別役割分業観や「男らしさ」，「女らしさ」など，特性が性に固有なものとする伝統的な価値観は差別につながる。

ジェンダー・フリーとは，たとえば，「女医」，「女性土木技術者」，「女性研究者」などを使わないということであり，ジェンダー・フェアとは，「合計〇名 (うち女性△名)」などの表現を使わないということである。また，パラレル・トリートメントでは，たとえば，女性の選手の場合には「〇〇子ちゃん」のように下の名前を「ちゃん」づけで呼び，男性の選手の場合には「△△」と姓で呼ぶなどの行為を行わないということである。インクルーシブネスとは，「青少年」や「父兄」など，女性を排除するような，包括的でない表現を使わないということであり，バイアス・フリーとは，「看板娘」や「マドンナ議員」，「女性ならではの気配り」など固定観念による表現を避けることを意味する。

5.2 田中和子・女性と新聞メディア研究会

田中・女性と新聞メディア研究会は，遠藤 (1997) と同様の全国紙三紙を対象に，意識的・無意識的な固定観念に基づいた表現や性差別表現 (「ジェンダー表現」) の調査研究を 1985 年から 5 年おきに 2006 年まで計 5 回にわたって実施し，その都度研究成果を報告している。最終回の調査が終了してからは，田中他 (2009a, 2009b, 2011) の 3 編にわたってその総まとめを行い，経年的変化／不変化の総括を踏まえて各種提案を行っている。

田中他が調査した対象は，人物紹介欄に限らず新聞全般にわたって見られる次の 3 点である：1. 女性としての存在や役割をもっぱら強調し，女性であることを突出させて注目させる「女性強調」(女性冠詞の使用・女性の役割強調・女性に関するステレオタイプ表現の使用など)，2. 女性の存在を紙面の背後に退かせ，女性の姿を見えなくさせる「女性隠し」(男性を世帯や家族の代表とする表現・女性を男性の付属物化する表現の使用)，3. 女性を男性とは異なった基準を用いて表現する「ダブルスタンダード表現」(女性報道で業績ではなく容姿など他の基準で評価・男女で異なる敬称使用・女性を名，男性を姓 (名) で表記する，など)

（田中他 2009a：56-57）。

田中他（2009a）は、1985年から2006年までの20年間に及ぶ調査結果から、新聞におけるジェンダー表現が薄らいできたように見えながら、その一方では強まっている面もあるとして、メディアによるジェンダー意識の再生産機能を再認識することの重要性を強調し、以下のように述べている：

……新聞制作者側は、人物を表現するに際して、多様な属性の一つにすぎない性別というカテゴリーに収斂した表現を用いたり、事件報道にあたって、性別がそのできごとの本質的要因を形づくっていない場合にも、結果的に当事者の性別を強調してしまうような、これまでの記事表現の慣習的“方法”について、今一度吟味してみる必要があるだろう。

（田中他 2009a：131）

また、田中他（2009b）では、蓄積した20年分のデータに追加の分析を施し、その結果を踏まえて、たとえば、「少年」や「青年」などの使用状況から、新聞が男性を人間の標準とみなす「隠れたカリキュラム」を流布する役割を日常的に担っている実態などを明らかにし、新聞の作り手がジェンダー表現に関して自らを意識化し、それを変革していくことの意義は決して小さくないことを指摘した上で、以下のように結んでいる：

言葉は変化し、また変化させることができる。ジェンダーに関する言葉を変えていくことによって、女性のみならず男性もまた、性のくびきや思い込みからより自由になれるはずである。新聞は、自らの紙面が言葉と表現をめぐる政治的アリーナでもあることを、いま一度認識すべきではないだろうか。

（田中他 2009b：80）

最終報告となる田中他（2011）では、男性が就くことが前提あるいは伝統とされてきた職業や地位を表す語について、女性のみを有標化（田中他では「有徴化」）する片面的な言葉は、通常は性別を表示しないニュートラルな語のみで表現し、どうしても性別を表示しないといけない場合には「女性の○○」と表すことで解決できるとし、言語計画・言語政策の問題でもあるとしている（田中他 2011：142-143）。また、性を含み込んだ職業語については、「看護婦」の使用が2002年3月から性別を含まない「看護師」へと法律上名称変更されたことが実社会での使用頻度の減少に反映されているとし、ジェンダー・ニュートラルな職業語の定着に、法律が一定の効果を示したことを指摘している（田中他 2011：185-186）。

さらに、「繁殖力が少ない語」については、語をリスト化して示す「事例ベース」で注意を呼びかけるのが単純明快な方法であるとしている。「繁殖力が強い語」については、造語

法が体系化・構造化されている可能性があるため（機械的に「女子」や「女性」をつけるなど）、「ルールベース」で注意を呼びかける必要があるとし、いずれにせよ、言語計画・言語政策のレベルでの改善方策を求めている（田中他 2011：199-203）。

上野他（1996）や田中他（2009a, 2009b, 2011）に挙げられている提案がすべて守られていれば、これまで見てきた女性を表す語句と表現の問題点は解決されていたものと思われる。しかし、2020年時点の状況を見る限り、実際にはそのようには進まなかった。のみならず、このようなジェンダー平等を実現するための提案をする研究者らは、多くの場合、多かれ少なかれ社会から何らかのバックラッシュ（反動、揺り戻し）を受けたというのが実状である。

6. 「かつぼう着の『リケジョ』の星」報道

6.1 各紙の報道ぶり

上野他（1996）、遠藤（1997）、田中他（2009a, 2009b, 2011）らが、それぞれの研究成果を踏まえてジェンダー平等実現のための各種提言を発し続けたものの、それらの努力がすぐに効果を表したというわけではない。2010年代に入ってからかなり経ってからでさえ、新聞を始めとするメディアのジェンダー平等に関する意識は、遅々として改善には向かわなかった。たとえば、2014年に世間を騒がせた STAP 細胞問題⁽⁷⁾が報じられた際には、週刊誌のみならず、全国紙においてさえも目を疑うような書き立てぶりであった。以下にその例を記す：

「負けん気培養、30歳大発見 STAP 細胞 小保方晴子さん」

（『朝日新聞』2014年1月30日東京朝刊 社会面）

「論文一時は却下…かつぼう着の『リケジョ』快挙」

（YOMIURI ONLINE, 2014年1月30日）

「STAP 細胞 リケジョ 常識覆す 先輩研究陣後押し ネイチャー却下めげず」

（『読売新聞』2014年1月30日大阪朝刊 社会面）

「かつぼう着の異彩リケジョ 小保方さん 実験室の壁ピンク／スッポン飼育」

（『東京新聞』2014年1月30日）

「理系女子『リケジョ』、万能の輝き STAP 細胞研究・小保方さんから刺激」

（『朝日新聞』2014年1月31日東京夕刊 社会面）

「キスでお目覚め『お姫様細胞』小保方さん 幻の命名案 STAP 細胞」

（『朝日新聞』2014年2月2日東京朝刊 総合）

『朝日新聞』も、科学面こそ「様々な組織へ、高い分化能力 STAP 細胞 小保方晴子リーダー

会見」（『朝日新聞』2014年1月30日東京朝刊）と、海外紙並に小保方氏を「（プロジェクト）リーダー」という肩書きで紹介しているが、その他の紙面では他紙同様、「小保方さん」と見出しにおいて「さん」づけで呼んでいる。この件で、各紙からコメントや解説を求められた京都大学 iPS 細胞研究所の山中伸弥教授は、例外なく「山中教授」と呼ばれている。これは、先に見た、「ジェンダー的公正報道の五原則」のパラレル・トリートメントの原則に反する行為である。のみならず、各紙ともこぞって、「かつぼう着」、「キスでお目覚め」、「お姫様細胞」など、学術的成果（と当時報道されたもの）とは全く無関係な小保方氏の「女の子らしい」ところを書き立てて、いわば「ギャップ萌え」⁽⁸⁾を煽っており、バイアス・フリーの原則からも外れていた。さらに、競って「リケジョ」（理系女子）を紙面に散りばめ、ジェンダー・フリーの原則からも逸脱していた。

本研究での分析対象ではないが、「リケジョ」に関して雑誌では、STAP 細胞事件以前も含めて、たとえば「男性にはわからない“リケジョ”の悩み 論理的な考えかたが恋愛の障害に!？」（『クーリエ・ジャポン』2013年9月1日）や「躍進遂げる理系の実力 Column 理系ミスコンからひとく摩訶不思議な理系女の生態」（『週刊ダイヤモンド』2013年10月2日）、「大調査！いまどきリケジョの生態 恋愛編 鼎談『リケジョはモテる』は本当か？」（『女性自身』2014年4月29日）など、さらに過激な見出しが使われていた。詳述するまでもなく、すべて「ジェンダー的公正報道の五原則」に違反するものばかりである。

一方、同じニュースを報じた海外紙やニュースサイトはどのような表現を用いていたのか。以下にその一例を示す：

“Stem cell breakthrough may be simple, fast, cheap”[幹細胞の画期的発見は安く、速く、簡単]

(CNN Health, CNN.com, January 30, 2014)

“A Bit of Stress Yields Stem-Cell Surprise” [少しばかりの負荷で幹細胞の驚くべき生成]

(*The Wall Street Journal*, January 29, 2014)

“New Method Could Be a Quicker Source of Stem Cells”[新手法でより迅速な幹細胞生成の可能性]

(*New York Times*, January 30, 2014)

“New stem cell technique may aid medical treatments”[幹細胞の新技術, 医学的治療を後押し]

(*Yahoo! Sports*, January 30, 2014)

“New method makes stem cells in about 30 minutes” [約 30 分で幹細胞生成の新手法]

(*Los Angeles Times*, January 29, 2014)

いずれの報道でも見出しに小保方氏個人の名前は見当たらず、幹細胞生成の画期的な新手法が発見されたかもしれないことのみを盛り込んでいる。本文では“researcher Haruko Obokata”とあるだけで、年齢や性別は書かれていない。言うまでもなく、そのような情報と STAP 細胞に関する発見とは何の関係もないからである。ましてや、白衣の代わりにかっ

ぼう着を着ているとか、負けん気が強いとか、研究室の壁がピンク色だとか、スッポンをペットとしているとか、泣き明かした夜もあったこと（「負けん気培養，30歳大発見 STAP 細胞 小保方晴子さん」『朝日新聞』2014年1月30日東京朝刊 社会面本文）とかの情報は一切不要である。しかし、当時は各紙とも、熱に浮かされたかのように一研究者をアイドル化して「ギャップ萌え」の対象に仕立てて販売部数／ビュー数を稼ごうとしていた。

6.2 スポーツニュースにおける女性アスリート報道との共通点

単に営業成績を上げるためのアイキャッチャーとしての「リケジョ」と「女の子らしさ」の組み合わせであったならば、（それはそれで問題ではあるが）まだ問題は浅かったかもしれない。別の可能性としては、当時は多くの記者が男性であったことを考えると、無意識のうちに、自分たちに達成できそうもない偉業を成し遂げた（と当時は思われた）小保方氏を自分たちでも手に負えそうなかわいらしい幼さの残る「女の子」に留めておこうとしていたことも考えられる。このような男性記者の心理について、森田（2008）が、スポーツの分野に関してではあるが、本来男の活躍の場であったスポーツの分野（「男の最後の砦」）で、女性が活躍することが内心穏やかでない読者／視聴者を無意識のうちに記者らが代弁して、女性を子ども／女の子扱いし、ワンランク下に位置づけて矮小化しようとしているのではないかと推測して、以下のような記事執筆の手法の例を挙げている（森田 2008：19-45）：

- ・アスリートであること以上に女性であることに注目（「子供への授乳」などを物語の中心に据える）
- ・年齢に関係なく「ちゃん」づけや呼び捨てにすることが多い（「愛ちゃん」「麻央ちゃん」「麻央」「藍ちゃん」「Qちゃん」「柔ちゃん」など）
- ・競技を離れて選手のプライベートを積極的に紹介する（「オフはパンづくりを楽しむ女性らしい一面をもつ」など）
- ・「女性らしい一面」の印象付けを行う（ぬいぐるみを大事にしていること、どんなケーキが好きか、ファッションセンスなど）
- ・独身・既婚の別、年齢に関する情報を含める
- ・出産すれば「ママさん選手」（「パパさん選手」とは決して言わない）
- ・夫や家族、コーチなど、「男性の支えがあつてこそ」の物語を構築

これらは、スポーツという文脈を理系の研究分野に置き換えれば、ほぼすべて「リケジョ」の記事に当てはまるものばかりであり、それだけに森田（2008）の推測は説得力があるように思われる。もし男性記者らが、このようなメンタリティーの下で記事を執筆しているのだとすれば、新聞記者の男女比率を劇的に変えるまでは、新聞記事はいつまで経っても変わら

ないことになる。そして、それが「現実にはね返って再生産される」ならば、いつまで経っても日本のGGGIは低迷し続けることだろう。また、女性であれば、ジェンダー平等な目を持てるかと言えば、必ずしもそうでないことも問題となる。長年、男性優位の社会の中で、「女性らしく」、「かわいらしく」していればちやほやしてもらえる経験を味わってきた日本人女性の多くは、いわば「男性の目」を内在化してしまっているために、女性が不利な立場にあることに全く無自覚な場合が多いのである。

6.3 「リケジョ」は差別用語か

当然、当時もこのような報道のあり方を批判する人々は存在し、インターネット上では特に「リケジョ」という表現が差別用語か否かという問題に関して議論が二分していた。「リケジョ」使用賛成派の言としては、以下のようなものがあつた：

- ・一括りにしてカテゴライズしてレッテルを貼ることで、それが指し示す集団を他から差別化し、語りやすくする（『リケジョ』は本当に差別用語なのか？『リケダン』や『草食男子』はどうかと、あえて言ってみる（片岡英彦）Yahoo! ニュースへのコメント」2014年2月4日）。
- ・そうすることで、言及される機会が増加し、社会で注目を浴びやすくなり、女性の理系分野への進出がしやすくなる可能性がある（『リケジョ』という言葉について私見『はむかず!』2014年2月4日）。
- ・そう呼ばれて特に何とも思わない「リケジョ」も多い（「小保方博士報道で困惑？理系女子に聞く『リケジョ』って言われるの、どう思う？」『ウートピ』2014年2月18日）。
- ・むしろ理科系を選択する女子学生を応援するために生まれた言葉（片岡英彦「『リケジョ』は本当に差別用語なのか？『リケダン』や『草食男子』はどうかと、あえて言ってみる」『Yahoo! ニュース』2014年2月3日）。

つまり、賛成派の意見としては、「リケジョ」は社会が求める女性の理系研究者・技術者を集団として命名することで顕在化し、その積極的な育成のために理系分野に中高生の女性に関心をひくことに一役買うキャッチフレーズであるのだから、その使用には何ら問題はない、というものである。また、内閣府男女共同参画局が開催した「リケジョのキャリア2013」や、講談社が理系女子応援サービスサイト『Rikejo』を立ち上げていることに言及するものも多く、政府機関や大手企業が用いていることを使用の正当性の根拠に挙げるものもあつた。

一方、「リケジョ」使用に反対する意見には以下のようなものがあつた：

- ・理系分野において、女性の研究者や学生がいかに特殊な存在であることを強調する差別用語（谷本 2014）。
- ・女子力だとか、リケジョだとか、そういう言葉とは一切関係ないと彼女が言い切ってくればよいのに。セクシャリティと研究者の能力は関係ない。むしろそこを結びつけようとするから、女性の研究者が増えない（林信長 @H_Nobunaga 『Twitter』 2014 年 1 月 31 日）。
- ・女子力とかリケジョとかいう言葉に潜む男性視線に少なくとも女性は気づくべき、と思う。なぜなら巧妙な権力作用とはこういうコトだから（林信長 @H_Nobunaga 『Twitter』 2014 年 1 月 31 日）。
- ・けっきょく、せっかく極端な男女不均衡を解消しようとして「リケジョ」みたいな言語戦略を打ち出したとしても、セクシズムがあまりにも強い環境では、《かつぼう着の「リケジョ」》みたいに消費されておしまいなんだよね（金明秀 @han_org 『Twitter』 2014 年 1 月 30 日）。
- ・「リケジョ」がほめ言葉だと思って使っている人もいるみたいだけど、単語に女とか男の性別つけて呼ぶときってその集団でマイノリティってことと、それ以外に何らかの付属イメージがつくわけですよ（タビトラ @tabitora1013 『Twitter』 2014 年 1 月 31 日）。
- ・リケジョって言葉、単に理系の女性、というより、女性"なのに"理系、というふうに使われているようにさえ思える（折原遥香 @swim0825 『Twitter』 2014 年 1 月 31 日）。

上記のように、反対意見としては、「女性副知事」や「女流監督」など、女性冠詞のついた言葉同様、男性が標準であることを是認し、女性を有標化し、例外的存在として周縁に押しやる効果があり、職業選択上の差別につながりうるため不快であるというものが多い。また、「女性なのにすごい」、「理系研究者なのに『女の子らしい』」、「リケジョでしかも美人」というようなステレオタイプを下敷きにする性差別的なニュアンスとともに使用されることが多いため、性質・能力上の差別につながる可能性があり不快であるという意見も見られた。この他、ハーバード大学大学院で研究するようになれっきとした研究者を「女子」呼ばわりするのは失礼だという、使用の文脈に対する批判もあった。

確かに、2013 年の時点で、日本の GGGI は 0.685 で、調査対象の 142 カ国中 104 位であり、日本の高等教育における STEM⁽⁹⁾分野の学生の割合は、女性 14 に対して男性 86 だった (World Economic Forum 『Global Gender Gap Index Report 2014』)。こうした事情を受け、前述の内閣府男女共同参画局主催の「リケジョのキャリア 2013」や講談社の『Rikejo』サイトなどが、官民挙げて「リケジョ」ブームを煽っていたことも社会背景としては存在する。とは言え、上野他 (1996) の「ジェンダー的公正報道の五原則」や田中他 (2009a, 2009b, 2011) の努力をすべて無に帰すような動きがあったことは、大変残念なことであった。

さらに、言葉の使用とは直接には関係しないが、2018年に起きた一部医学部における女性受験者の合格抑制事件は衝撃的であった。一方で「リケジョ」としてもてはやしたり、プロモートしたりしながら、他方で医者になる女性の数を抑制すべく入試において一律減点したり、逆に男性受験者に加点したりする慣習が何年もの間まかり通っていた。事件が明るみに出たきっかけとなった東京医科大学では、こうした点数操作の結果、この年の合格者は男性141人に対して女性30人だった。この結果だけを見て背後の不正を知らなければ、「やはり女性は理系には向かないのだ」と思う人もいたことだろう。このような不正が慣例となっていた理由としては、「女性は結婚や出産で職場を離れることがあり、人手が足りなくなるから」と指摘する関係者もいたという（『東京医大 なぜ入試で『女性差別』』『NHK解説アーカイブス』2018年8月7日）。女性医師の支援に力を入れれば問題は解決するであろうところを、逆に業界から締め出すような性差別を行う日本社会は（すべてがそうだとは言わないが）、やはりGGGIが示すとおり、ジェンダー平等後進国であると言わざるを得ない。

7. 『朝日新聞』の取り組み

7.1 「ジェンダー平等宣言」

2020年4月1日、朝日新聞社は、SDGs（持続可能な開発目標）の17ある目標の5番に当たる「ジェンダー平等の実現」に向けて、報道や各種事業、組織におけるジェンダーバランスをより意識するために、「ジェンダー平等宣言」を発表した。2019年のGGIが153カ国中、過去最悪の121位であったことに触れ、「女性活躍のために、メディアの果たす役割はきわめて大きいことが指摘されています。私たちは、責任あるメディア企業として自ら目標を掲げ、この課題に取り組んでいきます」と前置きし、6項目の宣言を発している（『朝日新聞社ジェンダー平等宣言』を公表『Asahi.com』掲載日2020年4月1日）。このうちの最初の項目には、本研究が対象とした「ひと」欄に関する記述もあるため、以下に引用する：

朝日新聞紙面や朝日新聞デジタルで発信するコンテンツは多様性を大切にします。取材対象や識者を選ぶ際には、性別などの偏りが出ないように心がけます。朝日新聞の朝刊にほぼ毎日掲載する「ひと」欄をその指標とし、年間を通じて男女どちらの性も40%を下回らないことをめざします。

なるほど、「ひと」欄では、3.1で見たように、女性を紹介する記事が30年前の1990年7月から1991年6月ではわずかに14.8%にすぎなかったのが、2020年7月から2021年6月では劇的に増加し、43.7%に達している。しかも、「ジェンダー平等宣言」前の2020年7月

1日から2021年3月までの女性紹介記事は平均40.3%だったのに対し、宣言後の2021年4月1日から6月30日の平均は53.0%になっている。宣言がまだ浸透しきっていなかったと思われる4月こそ、女性紹介記事は38.1%だったものの、5月では実に62.5%、6月では58.3%といずれも男性紹介記事を上回っている。このような数値はかつてないものである。

したがって、企画者や執筆者は、宣言に則ってかなり意識的にジェンダー平等を実現しようとしていることがわかる。もし、このように宣言することで状況を改善できるのなら、話題として取り上げる男女の数を平等にするだけでなく、上野他（1996）や田中他（2009a, 2009b, 2011）などが挙げたジェンダー表現に関する提言も、宣言中に記載して啓発すれば、ジェンダー表現の状況も改善する可能性がある。

7.2 「ひと」欄が取り上げる「偉業」の種類の変化

「ひと」欄が紹介する人物の性別には、以上のように、目覚ましい改善が見られた。まさしく隔世の感があるのだが、それにしては30年前と比べて、ジェンダー平等に関してそれほど社会の状況が改善したとは実感できないのはなぜだろうか。GGGIは2005年の状況を報告した2006年の数値からしか存在しないため、1990年代と現在を比べることはできないが、少なくとも2006年から2021年に至るまでは0.65前後に低迷し、一向に改善される気配がない。女性は男性が得るものの65%程度しか得ることができない状況がずっと続いているのだ。

紹介人物の性別均等化という目覚ましい改善状況と筆者が感じる相変わらずの不平等感の落差の原因を探るために、「ひと」欄で紹介される人物が、どのような話題で取り上げられたのかを見てみた。1990年代で目立つのが、長官、判事、総監、局長、次官、総長など、公職の高い地位に就いた人の紹介記事で、263件中90件ある。次に多いのが、たとえば文学賞を受賞したり、音楽コンクールで優勝したり、スポーツの試合に優勝したりなど、何らかの賞を受賞した人の紹介で、39件ある。残りは様々な活動に尽力した人や研究成果を上げた人などである。まさしく、世間的に見て「偉業」を成したと言える人を取り上げている。

一方、2020年代のほうも役職に就いた人物を取り上げているものが多いものの、もっぱら社長、事務局長、営業部長、監督、理事など、一般企業や民間組織、スポーツチームの長やトップに就任した人を取り上げたものであり、57件ある。公職の高い地位に就いたことが紹介されているのは、検事総長、検事正、陸上幕僚長の3件のみである。次に多いのは1990年代同様に、コンテストやレース、文学賞で賞などを獲得した人で、17件ある。その他は、社会貢献活動をしている人、映画のモデルになった人、団体を設立した人、NPO活動をしている人、飛び級で進学した人、環境問題に取り組む人、地域振興で頑張っている人など、実にバラエティーに富む。紹介される職業も、フィットネスインストラクター、管理栄養士、山岳遭難救助隊員、保健師、海女、バレリーナ、イラストレーターなど、多彩であ

る。

つまり、人物紹介欄は、かつては何らかの偉業を成したり、珍しいことをしたりした人を取り上げていたが、今日では、ごく一般の普通の人に取り上げられて紹介されているわけである。この違いが多様性を持たせるための意図的な人選から生じたものなのか、あるいは、取り上げる男女の件数を平等にしようとした結果なのかは、今後調べる必要のある課題である。もし后者であるならば、公職の高い地位に就くなどの特筆すべき「偉業」を成す女性が少ないがために、人数を十分に確保できないことに起因した方針変更である可能性も疑われる。そのようなことでないことを願うが、もしそうであった場合は、男女の紹介件数の大幅な改善と社会の状況改善の実感できなさの落差の一部は説明されることになるかもしれない。

8. おわりに

以上、本研究では、遠藤（1997）が1990年代初頭に行った新聞の人物紹介欄における女性を表す語句と表現の分析のうち、『朝日新聞』『ひと』欄に焦点を絞って、30年後である今日の状況と比較し、ジェンダー平等が実現されているか否かを分析した。分析の結果、紹介される人物は、かつては男性が8割以上にのぼったが、現在では男女ほぼ半々に改善されていた。また、女性の性格や心情などを表す手法としての記者による主観的表現も見当たらなくなっていた。これらは朝日新聞社の「ジェンダー平等宣言」による意識的な変化であることが見て取れた。

一方、「女性〇〇」などの女性冠詞を付した表現は数多く使われており、また、そうした語と「初の」、「初めての」、「唯一の」などの修飾語との共起頻度も高く、男性がデフォルトであり、女性はその立場にあることは例外的で珍しいという描かれ方が依然として使い続けられていることがわかった。女性を描くために用いられる家族情報も、1990年代ほどではないまでも、2020年代に至っても、女性はいくまでも夫の付属物であり、家事・育児をこなした上での活躍こそが賞賛に値するような書き方が、相変わらず見受けられた。

この30年の間に、上野他（1996）や田中他（2009a, 2009b, 2011）など、マスメディアが描く女性の問題点を分析し、その研究成果から社会に向けての改善策を提言する試みが行われてきた。そうした提言がメディア企業に届いているのか否かはわからないが、少なくとも朝日新聞社はSDGsへの取り組みとして、自ら「ジェンダー平等宣言」を発し、それを実現しようと努力していることが窺われた。日本社会の変化がいつもそうであるように今回もSDGs達成という外的圧力があるとはいえ、それに応えたマスメディアの内発的な動きであることから、今後かなりの状況の改善が期待できそうである。彼ら自身が自覚しているように、女性活躍のためにマスメディアの果たす役割はきわめて大きいことはこれまでの各種研

究によって明らかにされているところである。遠藤（1997）も言うように、「マスコミは現実を基に表現を生み出すが、その表現が現実にはね返って受け手の現実を規定し、それを補強して再生産していく」のである。

今後の課題としては、新聞社内部の事情、たとえばジェンダー表現のガイドラインなどの調査を行う必要がある。また、ジェンダー平等に関する読売新聞社や毎日新聞社など、他の新聞社の状況がどうであるのかも調べる必要がある。さらに、今回は30年間を一飛びで比較したが、田中他が1985年から5年おきに計5回実施した新聞におけるジェンダー表現の分析以降、どのような変化を辿ったのか（あるいは辿らなかったのか）、変化があったとすれば、何が要因となっていたのかも調査する必要がある。たとえば、法律によるジェンダー・ニュートラルな職名の制定であったり、今回のSDGsのような世界的潮流があったり、改善のためのきっかけを明らかにすることは、今後の改善につながりうる。マスメディアが主導して性差別表現の再生産を断ち切れば、日本社会において女性が置かれている状況を改善することも夢ではないかもしれない。しかし、そのためには、旧来の価値観を「伝統」として男女平等の扱いを拒んだり、あるいは無意識のうちの差別に無頓着なまま、ジェンダー平等の表現への提言を「言葉狩り」と呼んで批判したりするような人々の意識をどうやって変えるかが鍵となってくる。そうした人たちの意識を変えることができれば、GGGIも1に近づいていくに違いない。

注

- (1) 持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）とは、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。17のゴールと169のターゲットから構成されており、その5番目の目標が「ジェンダー平等を実現しよう：ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る」である（「SDGsとは？」『外務省』掲載日不明）。
- (2) 非営利財団の世界経済フォーラムが2006年より発行しているレポート Global Gender Gap Report（『世界男女格差レポート』）に公表される世界各国のジェンダーに基づく格差の不均衡を示す指標。「経済的参加と機会」、「教育達成」、「健康と生存」、「政治的エンパワーメント」の4領域から、経年的に格差は正の進捗を確認するものである。スコアが1に近い国ほど男女が平等として、スコアはランキングの形で示される（World Economic Forum 2021: 5）。
- (3) 夫妻を紹介する記事が1件あったため、合計件数は1件多い。
- (4) （ ）の中の数値は出現件数。ただし、同一の記事中で同一対象を指す場合は1回として数えている。
- (5) 社会の特定のグループのメンバーに不快感や不利益を与えないように意図された言語・政策・対策を表す言葉の総称。人種・宗教・性別などの違いによる偏見・差別を含まない中立的な表現や用語を用いることを指す（「ポリティカル・コレクトネスとは？」『平等』の本当の意味が面白い『HUFFPOST』2015年12月15日）。

- (6) 主語－述語，連体修飾語－体言などの係り受け関係を分析すること。本研究においては，テキストマイニングソフト KH Corder を用いた。
- (7) 2014 年 1 月，理化学研究所発生・再生科学総合研究センターの研究チームが STAP 細胞生成に成功したとの論文を英科学誌『ネイチャー』に発表した。しかしその後，同論文に対する不正疑義により調査が行われ，その結果，剽窃や改竄，捏造があったことが明らかになり，研究不正が認定され，同年 7 月，論文は正式に撤回された（「STAP 細胞問題」『ジャパナレッジ：日本大百科全書』掲載日不明）。
- (8) ある人物に関して自分が持っている印象と実際の性格などに落差（ギャップ）がある場合や，裏腹に思える二つの面を持っている場合で，そのギャップが自分にとって好ましいものであると，「こんな一面があったんだ，素敵だな」と感じる（「普段見せない一面を見せる「ギャップ萌え」の戦略的な使い方」『@DIME』掲載日 2021 年 3 月 20 日）。
- (9) STEM とは，Science（科学）・Technology（技術）・Engineering（エンジニアリング）・Mathematics（数学）の頭文字をとって作ったアクリニムで，理系分野を表す。

引用・参考文献

- 朝日新聞社用語幹事編（2019）『朝日新聞の用語の手引き（改訂新版）』朝日新聞出版。
- 「『朝日新聞社ジェンダー平等宣言』を公表」『Asahi.com』2020 年 4 月 1 日掲載，2022 年 4 月 9 日閲覧。
<https://www.asahi.com/corporate/csr/11215225>
- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会（1996）「ジェンダーの公正報道の五原則」『きつと変えられる性差別語：私たちのガイドライン』三省堂，8-9。
- 遠藤織枝（1997）「女性語を表す語句と表現：新聞の人物紹介と雑誌広告の欄から」井出祥子編『女性語の世界』明治書院，94-113。
- 「小保方博士報道で困惑？理系女子に聞く『リケジョ』って言われるの，どう思う？」『ウートピ』2014 年 2 月 18 日掲載，2022 年 4 月 4 日閲覧。
<https://wotopi.jp/archives/2217>
- 折原遥香 @swim0825 「リケジョって言葉，単に理系の女性」『Twitter』2014 年 1 月 31 日，2022 年 4 月 4 日閲覧。
<https://wirelesswire.jp/2014/01/20040/>
- 片岡英彦「『リケジョ』は本当に差別用語なのか？『リケダン』や『草食男子』はどうかとあえて言ってみる」『Yahoo! ニュース』2014 年 2 月 3 日掲載，2022 年 4 月 2 日閲覧。
<https://news.yahoo.co.jp/byline/kataokahidehiko/20140203-00032290>
- 「かつぼう着の異彩リケジョ 小保方さん 実験室の壁ピンク／スポン飼育」『東京新聞』2014 年 1 月 30 日
<https://ace.cnc.ne.jp/clip/GU206.php>
- 「帰国子女についての質問です」『YAHOO! JAPAN 知恵袋』2010 年 3 月 5 日掲載，2022 年 4 月 2 日閲覧。
https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1037566860?query=%E5%B8%B0%E5%9B%BD%E5%AD%90%E5%A5%B3%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E8%B3%AA%E5%95%8F
- 「帰国児童生徒の動向」『文部科学省』2009 年以前掲載，2022 年 4 月 2 日閲覧。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/004/001/004.html
- 「キスでお目覚め『お姫様細胞』小保方さん幻の命名案 STAP 細胞」『朝日新聞』2014 年 2 月 2 日東京朝刊 総合。
<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1650363970040>

共同通信社編 (2022) 『記者ハンドブック：新聞用字用語集第14版』共同通信社。

金明秀@han_org 「けっきょく、せつかく極端な男女不均衡を…」『Twitter』2014年1月30日掲載, 2022年4月2日閲覧。

https://mobile.twitter.com/han_org/status/428704943667965953?lang=ar-x-fm

「様々な組織へ、高い分化能力 STAP 細胞 小保方晴子リーダー会見」『朝日新聞』2014年1月30日東京朝刊。

<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1650364368165>

「『子女』の表現改めます」『日本教育新聞』2001年3月23日掲載, 2022年4月2日閲覧。

<https://www.kyoiku-press.com/post-152981/>

「STAP 細胞 リケジョ 常識覆す 先輩研究陣後押し ネイチャー却下めげず」『読売新聞』2014年1月30日大阪朝刊 社会面。

<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

「世界男女格差指数」『Wikipedia』最終更新日 2022年1月29日, 閲覧日 2022年3月26日

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%96%E7%95%8C%E7%94%B7%E5%A5%B3%E6%A0%BC%E5%B7%AE%E6%8C%87%E6%95%B0>

「大調査！ いまどきリケジョの生態 恋愛編 鼎談『リケジョはモテる』は本当か？」『女性自身』2014年4月29日, 96-97。

田中和子 (1984) 「新聞にみる構造化された性差別表現」磯村英一・福岡安則編『マスコミと差別語問題』明石書店, 179-201。

田中和子・女性と新聞メディア研究会 (2009a) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在：『新聞紙面』にあらわれたジェンダー」第五回調査を中心に」『国学院法学』第46巻第4号, 55-134。

田中和子・女性と新聞メディア研究会 (2009b) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在 (その2)：第五回調査データの多変量解析と投書欄, テレビ面・ラジオ面, 『少年』の用法分析を中心に」『国学院法学』第47巻第3号, 1-83。

田中和子・女性と新聞メディア研究会 (2011) 「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在 (その3)：『延べ語数』と『異なり語数』の経年分析および『言語計画』の観点から」『国学院法学』第48巻第4号, 127-231。

谷本真由美 (2014) 「一晩中泣き明かした30歳若手女性研究者と書く我が国にはゴシップ新聞しかないらしい (ロンドン電波事情)」『WirelessWire News』2014年1月31日掲載, 2022年4月4日閲覧。

<https://wirelesswire.jp/2014/01/20040/>

タビトラ @tabitora1013 「『リケジョ』がほめ言葉だと思って…」『Twitter』2014年1月31日, 2022年4月4日閲覧。

<https://twitter.com/tabitora1013/status/429101665875030016>

「男性にはわからない“リケジョ”の悩み 論理的な考えかたが恋愛の障害に!？」『クーリエ・ジャポン』2013年9月1日, 90-91。

「東京医大 なぜ入試で『女性差別』」『NHK 解説アーカイブス』2018年8月7日, 2022年4月4日閲覧。

<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/100/303228.html>

内閣府男女共同参画局 「令和3年版男女共同参画白書」2021年6月11日発行, 2022年3月3日閲覧。

https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/index.html

内閣府男女共同参画局 「女性活躍・男女共同参画の現状と課題」2022年3月公開, 2022年3月3日閲覧。

https://www.gender.go.jp/research/pdf/joseikatsuyaku_kadai.pdf

「ノート『帰国子女』」『Wikipedia』最終更新日 2019年2月17日, 2022年4月4日閲覧。

- <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%88%3A%E5%B8%B0%E5%9B%BD%E5%AD%90%E5%A5%B3>
- 林信長 @H_Nobunaga 「僕はべつにフェミニストではないけど…」『Twitter』2014年1月31日, 2022年4月4日閲覧.
- https://twitter.com/h_nobunaga/status/428983876933808128
- 林信長 @H_Nobunaga 「女子力だとか、リケジョだとか…」『Twitter』014年1月31日, 2022年4月4日閲覧.
- https://twitter.com/h_nobunaga/status/428982934138155009
- 「普段見せない一面を見せる『ギャップ萌え』の戦略的な使い方」『@DIME』2021年3月21日掲載, 2022年3月30日閲覧.
- <https://dime.jp/genre/1099443/>
- 「ポリティカル・コレクトネスとは? 『平等』の本当の意味が面白い」『HUFFPOST』2015年12月15日, 2022年4月4日閲覧.
- https://www.huffingtonpost.jp/yuko-fujisawa/political-correctness_b_8802070.html
- 「負けん気培養, 30歳大発見 STAP細胞 小保方晴子さん」『朝日新聞』2014年1月30日東京朝刊 社会面
- <https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1650363885328>
- 森田浩之 (2008) 『スポーツニュースは怖い: 刷り込まれる〈日本人〉』NHK出版, 19-45.
- 「躍進遂げる理系の実力 Column 理系ミスコンからひもとく摩訶不思議な理系女の生態」『週刊ダイヤモンド』2013年10月2日, 39.
- 「『リケジョ』という言葉について私見」『はむかず!』2014年2月4日掲載, 2022年4月4日閲覧.
- <https://hamukazu.com/2014/02/04/rikejo/>
- 「『リケジョ』は本当に差別用語なのか? 『リケダン』や『草食男子』はどうかと, あえて言ってみる (片岡英彦): Yahoo! ニュースへのコメント」2014年2月4日掲載, 2022年4月4日閲覧.
- <https://b.hatena.ne.jp/entry/bylines.news.yahoo.co.jp/kataokahidehiko/20140203-00032290/>
- 「理系女子『リケジョ』, 万能の輝き STAP細胞研究・小保方さんから刺激」『朝日新聞』2014年1月31日東京夕刊 社会面.
- <https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1650363918462>
- 「論文一時は却下…かつぼう着の『リケジョ』快挙」YOMIURI ONLINE, 2014年1月30日掲載, 2022年4月4日閲覧.
- <https://www.yomiuri.co.jp/science/news/20140130-OYT1T00213.htm>
- “A Bit of Stress Yields Stem-Cell Surprise.” *The Wall Street Journal*. January 29, 2014. Accessed September 13, 2014.
- <https://www.wsj.com/articles/SB10001424052702303973704579350433942612274>
- Global Gender Gap Report 2006 ~ Global Gender Gap Report 2021. *World Economic Forum*. Accessed April 9, 2022. <https://www.weforum.org/reports/>
- “New Method Could Be a Quicker Source of Stem Cells.” *New York Times*. January 30, 2014. Accessed September 3, 2014.
- <https://www.nytimes.com/2014/01/30/business/study-says-new-method-could-be-a-quicker-source-of-stem-cells.html>
- “New stem cell technique may aid medical treatments.” *Yahoo! Sports*. January 30, 2014. Accessed September 3, 2014. <https://sports.yahoo.com/news/stem-cell-technique-may-aid-154006944.html>

“New method makes stem cells in about 30 minutes.” *Los Angeles Times*. January 29, 2014. Accessed September 3, 2014. <https://www.latimes.com/science/sciencenow/la-sci-sn-stap-stem-cells-20140129-story.html>

「SDGs とは？」『外務省』掲載日不明, 2022 年 3 月 20 日閲覧.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>

Segrave, Jeffrey O., Katherine L. McDowell, & James G. King III (2009) “Language, Gender, and Sport: A Review of the Research Literature”. In Linda K. Fuller ed. *Sport, Rhetoric, and Gender: Historical Perspectives and Media Representations*. Palgrave Macmillan, 31–41.

「STAP 細胞問題」『ジャパナレッジ：日本大百科全書』掲載日不明, 2022 年 3 月 30 日閲覧.

<https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=51>

“Stem cell breakthrough may be simple, fast, cheap.” *CNN Health, CNN.com*. January 30, 2014. Accessed September 3, 2014.

<https://edition.cnn.com/2014/01/29/health/stem-cell-discovery/index.html>

(2022 年 4 月 20 日 受理)